新しいコレクション

菱田春草《松に月》

菱田春草(1874-1911)
《松に月》

1906年
絹本彩色・軸装
79.0×50.0cm
平成26年度購入

昨年の「菱田春草展」で紹介した《松に月》が当館のコレクションに加わりました。この作品は長らく行方知れずになっていましたが、なんとしても展覧会に出品したいと、あの手この手を使ってようやく探し当てた作品でした。

なぜこの作品を探していたかというと、この時期の春草作品には珍しく、制作時期がはっきりと分かる作品だったからです。春草はアメリカ・ヨーロッパ遊学中、ロンドンのヘンリー・グレーヴス社と契約し、帰国後、一九〇六年四月に作品をロンドンへ向けて送り出しました。《松に月》はそのうちの一点なのです。昨年の展覧会でこの作品は、春草の基準作として、他の作品の制作時期を推定するのにおおいに役に立ちました。

さて、この時期、春草はすでに「絵画について」という論文を発表して、これからは色彩研究に取り組むと宣言していました。その言葉のとおり、いくつかの作品で補色対比を試み、一九〇七年には斬新な色彩表現による《賢首菩薩》(当館蔵)を第一回文展に発表することになります。けれども、《松に月》にはそうした実験的な配色の試みは認められません。ビリジャン、コバルト、プルシャンブルーなどの西洋絵具こそ使っていますが、それは墨や胡粉(白)と混色しやすい色材を用いることで、豊かなグラデーションをつくることが目的だったといえます。

むしろ、この作品で注目すべきは空間表現の方です。浜、海、空と画面下方から色をぼかして積み上げた背景は、それだけでは等しく遠景となり、距離感という点では希薄だといえます。そこで、松の枝を最前面にさしはさみ、松葉の一本一本まで緻密に描いて、ぼーっとかすむ背景との間に空間を感じさせようというのです。

近接したモチーフと遠景表現をとりあわせて奥行きを生み出す手法は、浮世絵や秋田蘭画などで好んで用いられました。ゴッホが模写したことでも有名な歌川広重《名所江戸百景　亀戸梅屋敷》もその一例です。もしかしたら、春草はこのロンドン向けの作品において、ジャポニスムの流行していたヨーロッパの嗜好を意識してこの空間構成を試みたのかもしれません。たとえそうでなかったとしても、春草がそれまでのいわゆる「朦朧体」風の描写から一歩踏み出そうと研究を重ねていたことを、本作品は物語っています。

夢想的な月夜の光景を描いた《松に月》は美しいというだけでなく、この時期の春草の関心のありかをうかがう上で興味深い作品でもあるのです。来年三月頃にMOMATコレクションに登場する予定なので、楽しみにお待ちください。

(美術課主任研究員　鶴見香織)